酒虫

芥川龍之介

一

近年にない暑さである。どこを見ても、泥で固めた家々の屋根瓦が、鉛のやうに鈍く日の光を反射して、その下に懸けてある燕（つばめ）の巣さへ、この塩梅（あんばい）では中にゐる雛や卵を、そのまゝ蒸殺（むしころ）してしまふかと思はれる。まして、畑と云ふ畑は、麻でも黍でも、皆、土いきれにぐつたりと頭をさげて、何一つ、青いなりに、萎（しほ）れてゐないものはない。その畑の上に見える空も、この頃の温気（うんき）に中（あ）てられたせいか、地上に近い大気は、晴れながら、どんよりと濁つて、その所々に、霰（あられ）を炮烙（ほうろく）

で煎つたやうな、形ばかりの雲の峰が、つぶつぶと浮かんでゐる。――「酒虫（しゆちう）」の話は、この陽気に、わざ〱炎天の打麦場（だばくぢやう）へ出てゐる、三人の男で始まるのである。

　不思議な事に、その中の一人は、素裸で、仰向けに地面（ぢびた）へ寝ころんでゐる。おまけに、どう云ふ訳だか、細引（ほそびき）で、手も足もぐる〱巻にされてゐる。が格別当人は、それを苦に病んでゐる容子もない。背（せい）の低い、血色の好い、どことなく鈍重と云ふ感じを起させる、豚のやうに肥つた男である。それから手ごろな素焼（すやき）の瓶が一つ、この男の枕もとに置いてあるが、これも中に何がはいつてゐるのだか、わからない。

もう一人は、黄色い法衣（ころも）を着て、耳に小さな青銅（からかね）の環をさげた、一見、象貌（しやうばう）の奇古（きこ）な沙門（しやもん）である。皮膚の色が並はづれて黒い上に、髪や鬚（ひげ）の縮れてゐる所を見ると、どうも葱嶺（さうれい）の西からでも来た人間らしい。これはさつきから根気よく、朱柄（しゆえ）の麈尾（しゆび）をふりふり、裸の男にたからうとする虻（あぶ）や蠅を追つてゐたが、流石（さすが）に少しくたびれたと見えて、今では、例の素焼（すやき）の瓶の側へ来て、七面鳥のやうな恰好をしながら、勿体（もつたい）らしくしやがんでゐる。

あとの一人は、この二人からずつと離れて、打麦場の隅にある草房の軒下に立つてゐる。この男は、頤（あご）の

先に、鼠の尻尾のやうな髯（ひげ）を、申訳だけに生やして、踵が隠れる程長い皁布衫（さうふさん）に、結目をだらしなく垂らした茶褐帯（さかつたい）と云ふ拵へである。白い鳥の羽で製（つく）つた団扇を、時々大事さうに使つてゐる容子では、多分、儒者か何かにちがひない。

この三人が三人とも、云ひ合せたやうに、口を噤（つぐ）んでゐる。その上、碌に身動きさへもしない、何か、これから起らうとする事に、非常な興味でも持つてゐて、その為に、皆、息をひそめてゐるのではないかと思はれる。

日は正に、亭午であらう。犬も午睡（ごすゐ）をしてゐるせい

か、吠える声一つ聞えない。打麦場を囲んでゐる麻や黍も、青い葉を日に光らせて、ひつそりかんと静まつてゐる。それから、その末に見える空も、一面に、熱くるしく、炎靄をたゞよはせて、雲の峰さへもこの旱(ひでり)に、肩息をついてゐるのかと、疑はれる。見渡した所、息が通つてゐるらしいのは、この三人の男の外にない。さうして、その三人が又、関帝廟に安置してある、泥塑の像のやうに沈黙を守つてゐる。……

　勿論、日本の話ではない。――支那の長山(ちやうざん)と云ふ所にある劉(りう)氏の打麦場で、或年の夏、起つた出来事である。

二

　裸で、炎天に寝ころんでゐるのは、この打麦場の主人で、姓は劉、名は大成と云ふ、長山では、屈指の素封家（そほうか）の一人である。この男の道楽は、酒を飲む一方で、朝から、殆、盃（さかづき）を離したと云ふ事がない。それも、「独酌する毎に輒（すなはち）、一甕（いちをう）を尽す」と云ふのだから、人並をはづれた酒量である。尤も前にも云つたやうに、「負郭（ふくわく）の田三百畝、半は黍（きび）を種（う）う」と云ふので、飲（いん）の為に家産が累（わづら）はされるやうな惧（おそれ）は、万々ない。

それが、何故、裸で、炎天に寝ころんでゐるかと云ふと、それには、かう云ふ因縁がある。――その日、劉が、同じ飲仲間の孫先生と一しよに（これが、白羽扇を持つてゐた儒者である。）風通しのいゝ室で、竹婦人に靠れながら、棋局を鬪はせてゐると、召使ひの丫鬟が来て、「唯今、宝幢寺とかにゐると云ふ、坊さんが御見えになりまして、是非、御主人に御目にかゝりたいと申しますが、いかゞ致しませう。」と云ふ。

「なに、宝幢寺？」かう云つて、劉は小さな眼を、まぶしさうに、しばたたいたが、やがて、暑さうに肥つた体を起しながら、「では、こゝへ御通し申せ。」と云

ひつけた。それから、孫先生の顔をちよいと見て「大方あの坊主でせう。」とつけ加へた。

宝幢寺にゐる坊主と云ふのは、西域（せいいき）から来た蛮僧である。これが、医療も加へれば、房術も施すと云ふので、この界隈では、評判が高い。たとへば、張三の黒内障が、忽、快方に向つたとか、李四の病閹（べうえん）が、即座に平癒したとか、殆、奇蹟に近い噂が盛に行はれてゐるのである。――この噂は、二人とも聞いてゐた。その蛮僧が、今、何の用で、わざわざ、劉の所へ出むいて来たのであらう。勿論、劉の方から、迎へにやつた覚えなどは、全然ない。

序に云つて置くが、劉は、一体、来客を悦ぶやうな男ではない。が、他に一人、来客がある場合に、新来の客が来たとなると、大抵ならば、快く会つてやる。客の手前、客のあるのを自慢するとでも云つたらよささうな、小供らしい虚栄心を持つてゐるからである。それに、今日の蛮僧は、この頃、どこででも評判になつてゐる。決して、会つて恥しいやうな客ではない。――劉が会はうと云ひ出した動機は、大体こんな所にあつたのである。

「何の用でせう。」

「まづ、物貰ひですな。信施でもしてくれと云ふので

せう。」
　こんな事を、二人で話してゐる内に、やがて、丫鬟（あくわん）の案内で、はいつて来たのを見ると、背（せい）の高い、紫石稜（しせきれう）のやうな眼をした、異形（いぎやう）な沙門である。黄色い法衣（ころも）を着て、その肩に、縮れた髪の伸びたのを、うるささうに垂らしてゐる。それが、朱柄の麈尾（しゆび）を持つたまゝ、のつそり室（へや）のまん中に立つた。挨拶もしなければ、口もきかない。
　劉は、しばらく、ためらつてゐたが、その内に、それが何となく、不安になつて来たので「何か御用かな。」と訊いて見た。

すると、蛮僧が云つた。「あなたでせうな、酒が好きなのは。」

「さやう。」劉は、あまり問が唐突（だしぬけ）なので、曖昧な返事をしながら、救を求めるやうに、孫先生の方を見た。孫先生は、すまして、独りで、盤面に石を下してゐる。まるで、取り合ふ容子はない。

「あなたは、珍しい病に罹つて御出になる。それを御存知ですかな。」蛮僧は念を押すやうに、かう云つた。劉は、病と聞いたので、けげんな顔をして、竹婦人を撫（な）でながら、

「病――ですかな。」

「さうです。」

「いや、幼少の時から……」劉が何か云はうとすると、蛮僧はそれを遮(さへぎ)つて、

「酒を飲まれても、酔ひますまいな。」

「……」劉は、ぢろぢろ、相手の顔を見ながら、口を噤(つぐ)んでしまつた。実際この男は、いくら酒を飲んでも、酔つた事がないのである。

「それが、病の証拠ですよ。」蛮僧は、うす笑(わらひ)をしながら、語をついで、「腹中に酒虫がゐる。それを除かないと、この病は癒(なほ)りません。貧道は、あなたの病を癒しに来たのです。」

「癒りますかな。」劉は思はず覚束（おぼつか）なさうな声を出した。さうして、自分でそれを恥ぢた。

「癒ればこそ、来ましたが。」

すると、今まで、黙つて、問答を聞いてゐた孫先生が、急に語を挟んだ。

「何か、薬でも御用ひか。」

「いや、薬なぞは用ひるまでもありません。」蛮僧は不愛想（ぶあいさう）に、かう答へた。

孫先生は、元来、道仏の二教を殆、無理由に軽蔑してゐる。だから、道士とか僧侶とかと一しよになつても、口をきいた事は滅多（めつた）にない。それが、今ふと口を

出す気になつたのは、全く酒虫と云ふ語の興味に動かされたからで、酒の好きな先生は、これを聞くと、自分の腹の中にも、酒虫がゐはしないかと、聊(いささか)、不安になつて来たのである。所が、蛮僧の不承不承な答を聞くと、急に、自分が莫迦(ばか)にされたやうな気がしたので、先生はちよいと顔をしかめながら、又元の通り、黙々として棋子を下しはじめた。さうして、それと同時に、内心、こんな横柄な坊主に会つたり何ぞする主人の劉を、莫迦げてゐると思ひ出した。

劉の方では、勿論そんな事には頓着(とんちやく)しない。

「では、針でも使ひますかな。」

「なに、もつと造作のない事です。」
「では呪(まじなひ)ですかな。」
「いや、呪でもありません。」
かう云ふ会話を繰返した末に、蛮僧は、簡単に、その療法を説明して聞かせた。――それによるに、唯、裸になつて、日向(ひなた)にぢつとしてゐさへすればよいと云ふのである。劉には、それが、甚、容易な事のやうに思はれた。その位の事で癒るなら、癒して貰ふのに越した事はない。その上、意識してはゐなかつたが、蛮僧の治療を受けると云ふ点で、好奇心も少しは動いてゐた。

そこでとうとう、劉も、こつちから頭を下げて、「では、どうか一つ、癒して頂きませう。」と云ふ事になつた。――劉が、裸で、炎天の打麦場にねころんでゐるのには、かう云ふ謂（いは）れが、あるのである。

すると蛮僧は、身動きをしてはいけないと云ふので、劉の体を細引で、ぐるぐる巻にした。それから、僮僕（どうぼく）の一人に云ひつけて、酒を入れた素焼の瓶を一つ、劉の枕もとへ持つて来させた。当座の行きがかりで、糟邱（そうきう）の良友たる孫先生が、この不思議な療治に立合ふ事になつたのは云ふまでもない。

酒虫と云ふ物が、どんな物だか、それが腹の中にゐる

なくなると、どうなるのだか、枕もとにある酒の瓶は、何にするつもりなのだか、それを知つてゐるのは、蛮僧の外に一人もない。かう云ふと、何も知らずに、炎天へ裸で出てゐる劉は、甚、迂闊(うくわつ)なやうに思はれるが、普通の人間が、学校の教育などをうけるのも、実は大抵、これと同じやうな事をしてゐるのである。

三

暑い。額へ汗がぢりぢりと湧いて来て、それが玉になつたかと思ふと、つうつと生暖(なまあつたか)く、眼の方へ流れ

て来る。生憎、細引でしばられてゐるから、手を出して拭ふ訳には、勿論行かない。そこで、首を動かして、汗の進路を変へやうとすると、その途端に、はげしく眩暈(めまひ)がしさうな気がしたので、残念ながら、この計画も亦、見合せる事にした。その中に、汗は遠慮なく、眶(まぶた)をぬらして、鼻の側から口許(くちもと)をまはりながら、頤の下まで流れて行く。気味が悪い事夥(おびただ)しい。

それまでは、眼を開(あ)いて、白く焦された空や、葉をたらした麻畑を、まじ〳〵と眺めてゐたが、汗が無暗(むやみ)に流れるやうになつてからは、それさへ断念しなければならなくなつた。劉は、この時、始めて、汗が眼に

はいると、しみるものだと云ふ事を、知つたのである。そこで、屠所（としよ）の羊の様な顔をして、神妙に眼をつぶりながら、ぢつと日に照りつけられてゐると、今度は、顔と云はず体と云はず、上になつてゐる部分の皮膚が、次第に或痛みを感じるやうになつて来た。皮膚の全面に、あらゆる方向へ動かうとする力が働いてゐるが、皮膚自身は、それに対して、毫（がう）も弾力を持つてゐない。それでどこもかしこも、ぴり〳〵する――とでも説明したら、よからうと思ふ痛みである。これは、汗所（あせどころ）の苦しさではない。劉は、少し蛮僧の治療をうけたのが、忌々（いまいま）しくなつて来た。

しかし、これは、後になつて考へて見ると、まだ苦しくない方の部だつたのである。――そのうちに、喉（のど）が渇いて来た。劉も、曹孟徳か誰かが、前路に梅林ありと云つて、軍士の渇を医（い）したと云ふ事は知つてゐる。が、今の場合、いくら、梅子の甘酸を念頭に浮べて見ても、喉の渇く事は、少しも前と変りがない。頤を動かして見たり、舌を噛んで見たりしたが、口の中（うち）は依然として熱を持つてゐる。それも、枕もとの素焼の瓶がなかつたら、まだ幾分でも、我慢がし易かつたのに違ひない。所が、瓶の口からは、芬々（ふんぷん）たる酒香が、間断なく、劉の鼻を襲つて来る。しかも、気のせいか、

その酒香が、一分毎に、益々高くなつて来るやうな心もちさへする。劉は、せめて、瓶だけでも見ようと思つて、眼をあけた。上眼を使つて見ると、瓶の口と、応揚（おうやう）にふくれた胴の半分ばかりが、眼にはいる。眼にはいるのは、それだけであるが、同時に、劉の想像には、その瓶のうす暗い内部に、黄金（きん）のやうな色をした酒のなみ〳〵と湛（たた）へてゐる容子（ようす）が、浮んで来た。思はず、ひびの出来た唇を、乾いた舌で舐めまはして見たが、唾の湧く気色（けしき）は、更にない。汗さへ今では、日に干されて、前のやうには、流れなくなつてしまつた。

　すると、はげしい眩暈（めまひ）が、つづいて、二三度起つた。

頭痛はさつきから、しつきりなしにしてゐる。劉は、心の中（うち）で愈、蛮僧を怨めしく思つた。それから又何故、自分ともあるものが、あんな人間の口車に乗つて、こんな莫迦げた苦しみをするのだらうとも思つた。そのうちに、喉は、益々、渇いて来る。胸は妙にむかついて来る。もう我慢にも、ぢつとしてはゐられない。そこで劉はとう〳〵思切つて、枕もとの蛮僧に、療治の中止を申込むつもりで、喘ぎながら、口を開いた。――

すると、その途端である。劉は、何とも知れない塊（かたまり）が、少しづゝ胸から喉へ這ひ上つて来るのを感じ

出した。それが或は蚯蚓（みゝず）のやうに、蠕動（ぜんどう）してゐるかと思ふと、或は守宮（やもり）のやうに、少しづゝ居ざつてゐるやうでもある。兎（と）に角（かく）或柔い物が、柔いなりに、むづりむづりと、食道を上へせり上つて来るのである。さうしてとうとうしまひに、それが、喉仏（のどぼとけ）の下を、無理にすりぬけたと思ふと、今度はいきなり、鰌（どぜう）か何かのやうにぬるりと暗い所をぬけ出して、勢よく外へとんで出た。

と、その拍子に、例の素焼の瓶の方で、ぽちやりと、何か酒の中へ落ちるやうな音がした。

すると、蛮僧が、急に落ちつけてゐた尻を持ち上げ

て、劉の体にかゝつてゐる、細引を解きはじめた。もう、酒虫が出たから、安心しろと云ふのである。

「出ましたかな。」劉は、呻（うめ）くやうにかう云つて、ふらふらする頭を起しながら、物珍しさの余り、喉の渇いたのも忘れて、裸のまま、瓶の側へ這ひよつた。それと見ると、孫先生も、白羽扇で日をよけながら、急いで、二人の方へやつて来る。さて、三人揃つて瓶の中を覗きこむと、肉の色が朱泥（しゆでい）に似た、小さな山椒魚（さんしやうを）のやうなものが、酒の中を泳いでゐる。長さは、三寸ばかりであらう。口もあれば、眼もある。どうやら、泳ぎながら、酒を飲んでゐるらしい。劉はこれを見ると、

急に胸が悪くなつた。……

四

蛮僧の治療の効は、覿面（てきめん）に現れた。劉大成は、その日から、ぱつたり酒が飲めなくなつたのである。今は、匂を嗅ぐのも、嫌だと云ふ。所が、不思議な事に、劉の健康が、それから、少しづつ、衰へて来た。今年で、酒虫を吐いてから、三年になるが、往年の丸丸と肥つてゐた俤（おもかげ）は、何処にもない。色光沢（いろつや）の悪い皮膚が、脂じみたまま、険しい顔の骨を包んで、霜に侵された

双鬢が、纔に、顳顬の上に、残つてゐるばかり、一年の中に、何度、床につくか、わからない位ださうである。

しかし、それ以来、衰へたのは、劉の健康ばかりではない。劉の家産も亦とんとん拍子に傾いて、今では、三百畝を以て数へた負郭の田も、多くは人の手に渡つた。劉自身も、余儀なく、馴れない手に鋤を執つて、佗しいその日その日を送つてゐるのである。

酒虫を吐いて以来、何故、劉の健康が衰へたか。何故、家産が傾いたか——酒虫を吐いたと云ふ事と、劉のその後の零落とを、因果の関係に並べて見る以上、

これは、誰にでも起りやすい疑問である。現にこの疑問は、長山に住んでゐる、あらゆる職業の人人によつて繰返され、且、それらの人人の口から、あらゆる種類の答を与へられた。今、ここに挙げる三つの答も、実はその中から、最、代表的なものを選んだのに過ぎない。

第一の答。酒虫は、劉の福であつて、劉の病ではない。偶（たま〱）、暗愚（あんぐ）の蛮僧に遇つた為に、好んで、この天与の福を失ふやうな事になつたのである。

第二の答。酒虫は、劉の病であつて、劉の福ではない。何故と云へば、一飲一甕を尽すなどと云ふ事は、

到底、常人の考へられない所だからである。そこで、もし酒虫を除かなかつたなら、劉は必久しからずして、死んだのに相違ない。して見ると、貧病、迭（かたみ）に至るのも、寧（むしろ）劉にとつては、幸福と云ふべきである。

第三の答。酒虫は、劉の病でもなければ、劉の福でもない。劉は、昔から酒ばかり飲んでゐた。劉の一生から酒を除けば、後には、何も残らない。して見ると、劉は即（そく）酒虫、酒虫は即劉である。だから、劉が酒虫を去つたのは自ら己を殺したのも同前である。つまり、酒が飲めなくなつた日から、劉は劉にして、劉ではない。劉自身が既になくなつてゐたとしたら、昔日（せきじつ）の劉

の健康なり家産なりが、失はれたのも、至極、当然な話であらう。

　これらの答の中で、どれが、最よく、当を得てゐるか、それは自分にもわからない。自分は、唯、支那の小説家のDidacticismに倣（なら）つて、かう云ふ道徳的な判断を、この話の最後に、列挙して見たまでゝある。

――五年四月――

底本：「芥川龍之介全集　第一巻」岩波書店
１９９５（平成７）年11月8日発行
親本：「鼻」春陽堂
１９１８（大正７）年7月8日発行
入力：earthian
校正：林めぐみ
１９９８年11月13日公開
２００４年3月9日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。